北星学園大学経済学部北星論集第53巻第２号（通巻第65号）（2014年３月）・抜刷

L. ガル著『アプス伝』における戦時下のアプス像
――諸アプス批判への反論の基本視点――（３）

山　口　博　教

L. ガル著『アプス伝』における戦時下のアプス像
――諸アプス批判への反論の基本視点――（3）

山　口　博　教

目次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．諸アプス批判論に対するL. ガルの著作の展開
　1．L. ガルのアプスに関する三著作
　2．第一著作（論文）の構成
　3．第二著作『アプス伝』と関連CD及びその目次
　4．第三著作について
Ⅲ．L. ガル『アプス伝』における戦時下のアプスの活動
　1．序章
　2．帝政期における子供時代
　3．ヴァイマール共和国期における修行・遍歴時代
　4．「個人銀行家」へ飛躍する時代
　5．第3帝国下，ドイチェバンク取締役の時代
　　（1）ドイツ最大のユニバーサルバンク外国部への就任
　　（2）オーストリアの併合とクレディトアンシュタルト（以上，前々号）
　　（3）メンデルスゾーン銀行の「アーリア化」？
　　（4）フベルトゥス株式会社（Hubertus AG）
　　（5）ベーメンにおけるアプスと東南欧州への進出
　　（6）東南欧州への進出と資本参加，及びソシエテ・ジェネラール
　　（7）ベネルクスの業務，ライヒスベルケへの対応
　　（8）古い業務関係
　　（9）オーバーシュレージェンにおける裏のない契約（以上，前号）
　　(10-1) クロイガー債と国家機密
　　(10-2)「為替」準備特別寄託と仲介人
　　(10-3) 占領・中立諸国間の金転送と「メルマー金」の問題
　　(11) アプスの抵抗運動への関わり（間接的支援）
　　(12) IGファルベン問題でのアプス非難とガルの反論
　　(13) 銀行と化学企業，アウシュヴィッツの工場立地とIGファルベンの増資（以上，本号）
　6．1945年以後の権力なき無職の時代
Ⅳ．諸アプス批判への反論の基本視点について
Ⅴ．まとめ

Ⅲ．L. ガル『アプス伝』における戦時下のアプスの活動

5．第3帝国下，ドイチェバンク取締役の時代

（10-1）クロイガー債券と国家機密

「1940年に同時に取り組んだいわゆるクロイガー債の部分的償還に関しては，事態が異なるものであった。」という書き出しでガルは上記次の二つの項目について書き出している。ただしここでガルが指摘しているのは，この業務にアプスがドイチェバンクの取締役員として従事したのではなかった点である。すなわち機関委託を受け，かつその法人名で集団を率いたのではなく，個人として直接ライヒ指導部の下で委任された業務としてであったと。しかもそれは権力の中心にあって犯罪的な行為に手を染めたライヒ指導部からの委託ではなく，またその任務も国家の「通常」の財政活動の枠内に収まるものであった。もっとも，この国家においては「通常」といえるべきものはほとんどなく，財政上の手助けは，これを行う者をある程度巻き込むことになったことをガルは断ってはいるのではあるが。

このような微妙な表現をしなければならなったのには，理由がある。このことは，ガルの以下の著述でも次第に明らかとなってくる，ユダヤ人と被占領地の住民ら略奪した金（金塊）の転送とそれを隠蔽する国家機密の問題が背後にあるからである。ただし，ガルはこの点に関する資料的根拠について脚注で次の

キーワード：L. ガル『アプス伝』，諸アプス批判論，L. ガルの反論の視点

ようなコメントしている。

「ライヒの側から詳しい背景について書かれた包括的な書類は，恐らく完全に消失している。現在モスクワにある『4カ年計画の全権委任』範囲という点で資料の保存量を見ていっても，補足的説明は得られない。（シュテファン・ヴェンデホルスト博士（Dr，Stephan Wendehorst）からの友好的な報告より）」[78]

以上の指摘からこの問題では資料の制約を伴い，判断が難いことを断っている。この点については順次触れることにして，まずクロイガー債について見ていこう。

ガルの説明によるとこの債券発行はヴァイマール時代に遡る。ドイチェ・ライヒ（ドイツ帝国）が信用力を失った1929年に，スェーデン人の燐寸（マッチ）製造業者であるクロイガーが1億2500万ドルの低利の融資をライヒに申し出た。その見返りにクロイガーは他の国でも確保していた燐寸製造の長期に渡る独占を条件としていた。

しかしこの債券でクロイガーは自分の信用枠を逼迫させてしまった。金債券（Goldobligation）を使った再融資（Rückfinanzierung）と株式発行はうまくいかず，利子受取以上のコストがかかってしまっていた。これを独占的超過利潤で相殺しようにも，大不況のためその実現は困難となった。さらに，クロイガーの自殺と1932年のコンツェルン崩壊は金融界全体を揺るがす大事件となった。株式に対する破産割り当ては0.5%で，経費が上回るため取り立てをする意味がなかった。ドイチェバンクは，銀行の勧めでこの債券を買った株主に対し1940年代に入るまで繰り返し悲劇的報告をしなければならなかった。

クロイガー債の大量破産から，この時代のクロイガー債の出資持分証券が残されてしまった。ここからガルはこの証券の行方について追いかけていく。これらはまずクロイガー債の信用を担保するためにスウェーデンの銀行抵当として組入れられ，低利で引き受けられた。その相場が低かったのは，ドイチェ・ライヒが利払いと償還をすることが困難であったためであり，第2次世界大戦勃発後も問題は変わらなかった。

国内の債務超過はライヒスマルクの安定性を危うくしたが，外貨によるこの出資証券の受け戻しは魅力的に考えられた。第1次世界大戦時時にも，被占領国で交換不可能なライヒスマルクによる証券買戻しが追及されていた。しかしスウェーデンが大量に抱えていた外国持ち分であるクロイガー債に対しては，この方法は不可能であった。

このためドイチェ・ライヒが考え出したのは，西側で価値がないライヒスマルクの代わりに取得された外貨と金準備（低価の金）を使いライヒの負債を解消することであった。この主導権を取ったのが，ゲーリング傘下にあった内閣内局（ministeriumsahnliche Behörde）の「4カ年計画全権委員（Beauftragte für den Vierjahrepalan）」であったことを，ガルはラダントに従い述べている。当時為替業務に携わっていたオットー・ヴォルフ商会（Firma Otto Wolf）がこの清算業務を引き受けていたが，この業務にアプスを引き入れることを提案した。また当時マーガリン連盟（Margarine Union）で活動中のカール・ブレシング（Karl Blessing－戦後ドイツ連邦銀行総裁）も助言を求められ，アプスにストックホルムにあるエンスキルダ・バンク（Enskilda Bank）のスェーデン人銀行家ヤコブ・ヴァレンベリ（Jacob Wallenberg）をベルリンへ招くよう勧めた。また実際に彼の招聘を仲介したのはライヒスバンク副総裁エミール・プールであった，とガルはプールの書簡から推測している。この結果アプスとヴァレンベリは1940年9月12日から14日の間に合計7時間かけて，クロイガー債

買戻し方法を話し合った。場所は不明であるが，双方ともに仲介役（仲買人（(Kommissionär)）として交渉したことをガルは指摘している[79]。

両者の交渉結果，クロイガー債に関する出資証券は相場の40%で，0.5%の手数料と年利を付けてヴァレンベリが民間人アプスへ提供することになった。アプス側からの交渉は，オットー・ヴォルフ商会を通さず，プールを通して行われた。これはアプスに対しては，この商会の役割についての情報が与えられていなかったためではなかった，とガルは推測している。

ヴァレンベリが提供した持分証券は2,900万ドル分がクロイガーのハウスバンクであったスカンディナヴィスカ・バンク（Skandinaviska Bank）の下にあり，1,100万ドル分がクロイガーとヴァレンベリのエンスキルダ・バンクと密接な関係にあったスェーデンの電話会社エリクソン（L.M.Ericsson）のもとにあった。後者はクロイガーの破産で負債を抱え，出資証券の売却利益を期待した。

業務遂行のためアプスは9月19日から3日間エンスキルダ・バンクを訪問した。同時にライヒスバンク外国為替局のハンス・トロイエ（Hnas Treue）と以下のことを合意していた。それは，シュヴェーディシェ・ライヒスバンク支配人のイーヴァル・ルーツ（Ivar Rooth）と金転送について，詳細な背景を知ることなく交渉することであった。他方ヴァレンベリ自身はシュヴェーディシェ・ライヒスバンクとの事前の合意なしに，金を引き受けようとは考えていなかった。けだし，スウェーデン政府と同国中央銀行であるリクスバンク（Riksbank）*がこの取引に関心を示していた。というのは1940年のデンマークとノルウェーの占領後に，スウェーデンは石炭と人造肥料についてはドイツ支配圏に依存せざるを得なくなっていて，ライヒとの清算業務上赤字を抱えていたからである。

* リクスバンクはスヴェリイェス・リクスバンク（スウェーデン国立銀行（(Sveriges Riksbank)）の略称であり，ドイツ語表記ではシュヴェーディシェ・ライヒスバンク（Swedische Reichsbank）となる。ガルは，シュヴェーディシェ・ライヒスバンク（Swedische Reichsbank）とリクスバンク（Riksbank）の用語を併用している。このため以下の記述では，二つのライヒスバンクが登場する。このため，本稿では単なるライヒスバンクの場合には「ドイチェ・ライヒスバンク」を指すこととし，リクスバンクを指す場合のみ「シュヴェーディシェ・ライヒスバンク」と記述している。

この結果，交渉は急速にまとまり，アプスは出資証券を受け取り，外貨と金で1,650万ドルを支払った。9月26日にライヒスバンクは仲介役のアプスに2,450万ドルに値する8,428キロの金と，600万ドルの外貨及び580万スウェーデン・クローネンを利用させた。これに金転送費用の16万7,000RMを加えた。総額で4,200万ドルとなるクロイガー債出資証券の支払いのためであったが，100万ドル分が不足していた。プールが数日遅れでこれを知らせたが，第三者によって清算されていた。

オットー・ヴォルフ商会は交渉時には表に出なかったが，アプスへの仲介手数料の配分を引き受けた。4年計画の業務清算はプールにより行われた。4カ年計画に対する5,800万RMの利益が，財務省への出資証券の転売で生じていたと。財務省は1億100万RMのライヒ債に対して払い込みを行った。またアプスが受け取った手数料はトックホルム行の旅行費用を除いた593.96RMであって，それ以上でもそれ以下の個人的収益ではないことを，自慢していたことをガルは紹介している。

その後さらにクロイガー債に係わる小規模な付随業務があり，アプスはこれにも取り組

んだ。4,800万ドルの名目価値を持つ出資証券であり，ライヒはさらにこのために185キロの金を用意した。これにはオットー・ヴォルフ商会はかかわらなかった。新業務は国家機密として取り扱われ，この詳細の展開については，ブレッシングとプールをとしか話すことが許されなかった。自身も「これらの動きがいかなる目的をもっていたのか伺い知れない。」と述べていた[80]。

以上のことを総合すると，アプスは個人的な人脈をもつため，ライヒから国家負債の清算業務を委託され，引き受けた。この中には，通常の経済業務と国家機密に関連する業務の双方が含まれていた。アプスが後者についてどの程度意識していたか，に関してはガルのここまでの記述からは見えてこない。

（10-2）「為替準備」特別寄託と仲介人

以上のガルの記述から，クロイガー債に係わる出資証券のドイチェ・ライヒによる買戻しには，不明な点が含まれていることが見て取れる。「特に4カ年計画全権委任機関の通常利益は財務省のコスト負担による利益であった」ことについてガルは以下のコメントを与えている。「『第三帝国の権力構造からしか以上の事態を説明することができない。ゲーリングと『4カ年計画』はこの取引から得られる利益を利用した（以下略）。」なおこの点を説明するために，ガルはハンス・ラダント（Hans Radandt）の著作に引用されているカドギエン（Kadgien）担当官のメモを紹介している。それによるとこの利益はゲーリング管理機構への資金付与となっていて，政治的目的のために使われたのであると[81]。

このような内部抵抗を無視して，アプスの提案にもとづくベルリンでの会合において，補足的な買戻しコンセプトが展開された。名目で5,000万ドルのクロイガー債のうち，2,000万ドルが相場の40%で取得された。残りの額は10年間で割り引かれた利子で償還された。（燐寸製造－筆者）独占権の買戻額には，ドイツからスウェーデンへ転送された利益をもとに1,500万ドルの税金が掛けられた。しかしその買戻しの正確な期限は決められなかった。

一方財務省はこの点については拒否的な態度を取り，4カ年計画の最後の協定以降，クロイガー債の残りの半分の取得には関心を持たなかった。財務省が購入に関心を持つのは，独占が解消される場合であった。このことをガルは，ライヒ財務省の部長でライヒスバンク首脳でもあったバイアホファ（Bayrhoffer）のアプス宛て書簡から読み取っている[82]。

バルバロッサ作戦の準備により，戦争の即時終結の見込みが解消されたため，ドイチェ・ライヒの対外債務を整理する重要性は失われた。クロイガー債5,000万ドルのうちの残された負債は存続したが，アプスには好条件で仲介業務を行う希望は打ち砕かれていた。ただしシュヴェーディシェ・ライヒスバンク及び関係銀行が業務の継続を望んでいた。ガルのこの点についての記述については省略する。アプスは，この業務継続いかんについての決定が，ドイツ財務省の手中にあることを示唆していたという。このことをガルは指摘している。

なおこの問題は戦後にも継続した。アプスは1952年にロンドン債務協定会議において再度クロイガー債に関わらざるを得なかった。残額5,000万ドルは債権諸国の債券となり，その一部は長期間かけて償還された。こうして1983年に燐寸独占権は最終的に解消された。

さてクロイガー債業務の総決算をガルは以下のようにまとめている。この取引の長期的利得者は，仲介者のアプスとドイツ連邦共和国とスウェーデンの債権者であった。特にアプスは僅かな日数で1年間分の所得を稼いでいたことを，ガルは書いている[83]。

以上，クロイガー債業務はドイツとスウェーデン双方の財政問題が絡む取引であった。こ

のため中央銀行が最終的にこの取引を担当したが，その前に交渉に臨んだのは両国の民間人であった。これまで見たようにアプスはドイチェバンクの代表者としてではなく，個人としてこの交渉に臨んだことをガルは主張する。しかし以上のことを総合的に考えると，民間人としてあれ，アプスはこれらの業務では国家機密機関の要請に応じたことになるが，この点については後で再度検討する。

次にガルは，ライヒスバンクが以上の取引に必要とされた金をどこから取得したかの問題に焦点を移す。これは「立てるのはやさしいが，回答するのは困難な問題」[84]と述べることから始めている。外国為替・外貨には痕跡が残されていない。ただしかなりの確実性をもって，「4カ年計画」が利用していた「為替準備」特別寄託から出たものであることを紹介する。[85]そしてこの寄託額の変動は，ライヒスバンクのベルリン金庫主勘定帳を再構成してみると，ドイツ勢力圏の拡張と結びついていたことが判明する。すなわちオーストリアその他ドイツが占領した諸国から「供給された」60トンの金と関係したことを，ガルは指摘している[86]。

以下ではこれらの金の出所の問題を含め，これらの行方についてガルの記述は進められる。まずクロイガー債買戻しのため融資された8,6トンのうち5,5トンは，1940年9月25日に「為替準備特別寄託」から，シュヴェーディシェ・ライヒスバンクがドイチェ・ライヒスバンクのベルリン金庫に新たに開設した三つの寄託（口座）へ 移管された。[87]そして1941年2月1日にこのベルリン寄託は解消され，金塊が「為替準備」特別勘定に再度貸方記入された。シュヴェーディシェ・ライヒスバンクの勘定書がその利用目的について以下の説明をしていることを，ガルはここで取り上げている。それは以下の三部分に分かれていた。

① ベルリン寄託の最小部分88kgは1940年秋にライヒスバンクに売却された。

② 寄託分4,125kgはイーヴァル・ルーツが，1941年に生じたスウェーデンの債務決済のための資金とした。

③ 三番目の部分1,403kgは1940年12月にベルリンへ移管され，さらに1941年7月にスイスの中央銀行であるシュヴァイツェリシェ・ナチオナルバンク（Schweizerische Nationalbank）に売却された。少し遅れて同様にスウェーデンの膨大な金の持分がスイスへ移され，為替の代わりに売却されていった。残りの3,003kgもライヒスバンクはクロイガー債出資証券の買い戻し目的で融資をしたが，これは同行が1940年にストックホルムに寄託したものであった。そして1941年の1回の転送では総計3,682kgの金が，スウェーデンからベルリンへ送られた。このうち2,540kgはイタリアがスウェーデンへ空軍物資を供給する見返りに，イタリアに対し支払われた[88]。

ここに見られるのは，ドイツ第三帝国とその「中立国」間で行われた，軍需物資供給とそれに伴う金の転送の一幕である。その一部にすぎないが，ガルの記述はこれを反映している。この詳細については，次の項で扱うが，これらの業務にアプスがどのように関わり，事実関係を把握していたのかどうかについてガルは以下のように問題としている。

まずアプスのメモからみて，彼が金と為替の出自について関心を持っていたことを示唆するものは何もない，とガルは捉えている。ただしアプスは被占領地において，合法性を装った金・為替準備の取引から利益をくみ出そうとしたナチス体制のおおよその動きについてはほぼ掌握していた，とも述べている。1940年5月9日の彼の契約書が示すように，西側諸国の金と為替取引については情報を与えられ，開戦以来の準備金の移動についても

知っていたことをアプスは文書で明示している。ただし私的所有物ではかなり神経質であった彼が，不明な出所の所有物を取引することについて，正当化していたのかどうか，という点に関しては，推測の域を出ないとガルはみている[89]。そこで以下ではこの金の転送問題を取り上げる。

（10-3）占領・中立諸国間での金転送と「メルマー金」の問題

この問題との関連でガルは二つの重要な論点に触れている。一つは，ドイチェバンク・イスタンブール支店が関わった金取引業務の問題であり，他の一つは「メルマー金」の問題，すなわち戦後早い段階で明らかになった強制収容所からライヒスバンクへ転送された貴金属及び金の問題である。これらの問題についてはジョナサン・スタインバーグが1999年に刊行した著作 *The Deutsche Bank and its Gold Transactions during the Second World War* の中で，資料の制約を意識しながらもパズルを解くようにその全容の解明を試みている。そこでまずスタインバーグの著作をまず見た上で，ガルの見解を検討することとしたい[90]。

スタインバーグはその著作の第一章（序論）で以下の問題提起をした。第一に，スイスとドイツの銀行は金がどこから来たか，ドイツの銀行が知っていたかどうか。第二に，もしそうなら今日どういう責任があるのか。第三に，どの位の量の取引であり，今日ではどの位の価値をもつのか。第四に，金転送の目的は何だったのか。第五に，戦後どの位が残され，誰の手元にあるのか。第六に，ナチス占領下の欧州の国または個人から盗まれたものであるなら，返却されるのかどうか。第七として，もし返されないなら略奪品が正当な所有者に返却することを誰が監視するのか[91]。

そして次の第二章では戦時下の金の重要性について，以下のように指摘している。「未払い資金を決済するだけではなく，ナチスの軍備が必要とした原材料物資を支払うためのハード・カレンシーを入手するためにも重要であった」と[92]。それはスペイン・ポルトガルが提供したタングステンやスウェーデンの鉄鉱石，トルコの亜鉛鉱などであった。これらの中立国はその支払にドイツ通貨を望まなかったため，1941年までは合衆国ドルが使われていた。しかし同年6月14日から合州国はブリテンとともに敵性資産を凍結し，欧州中立国のニューヨーク・ドル為替を制限した。

このため，スイス・フランのみがライヒスバンクにとって使用できる外貨となり，これを入手するためドイツはシュヴァイツェリシェ・ナチオナルバンクへ金転送を開始し，この金を他の中立国がスイスから購入した。この過程でシュヴァイツェリシェ・ナチオナルバンクは同国の商業銀行を，ライヒスバンクとの金取引における重要なパートナーへ置き換えていった，とスタインバーグはみている。

この金転送業務にはドレスナーバンクと並んでドイチェバンクも関わったのであるが，その役割はシュヴァイツェリシェ・ナチオナルバンク及びスイスの商業銀行に比べると小さなものであった。その理由としてスタインバーグは以下の要因を挙げている。そもそも国際業務を中心として活動していたドイチェバンクは，第一次世界大戦でのドイツの敗北により，国外資産を喪失していた。また同行はユダヤ系役員が多く，ヒトラー政権下では牽制を受けていた。ただし彼らは1933年以降には「アーリア化」により排除され，この結果カトリック教徒役員の影響が大きくなっていた。（レースラー，アプス，プラスマン，ベッヒトフ等）また役員の中には，ヒムラーやSSに対し口座開設等の便宜を図った，ナチス党員のカール・リッター・フォン・ハルト(Karl Ritter von Halt)が混じっていた[93]。

ドイツがオーストリア併合とチェコに侵入

した後，同行は「アーリア化」業務と並び新市場での新業務を獲得した。また子会社のドイチェ海外銀行（Deutsche Überseebannk-DUB）とドイツ大西洋銀行（Banco Alemán Transatlántico-BAT）が南米とスペインで活動を活性化した。またスイスの諸銀行とドイチェバンク取締役のアルフレート・クルツマイアー（Alfred Kurzmeyer）がスイスの銀行とベルリンの間を行き来し，また南米とも連絡を取り，業務を先導した。

なおドイツが行った金転送では，トルコも大きな役割を持たされていた。この国の金保有量は同国の「ゴールド・レポート」によると，1937年から45年にかけて27.4トンから216トンへ増加したという。そしてドイチェバンクのイスタンブール支店へ「メルマー」という名が付いた金が持ち込まれた。このことについてはガルも否定はせず，以下のことを明示している。

まずイスタンブール支店はドイチェバンク唯一の国外直接子会社であり，アプスは外国部長として関与していた。この支店にはライヒスバンクが取得した金があり，この中には1942年半ばに供給された744kgの「メルマー金」が含まれていた。またナチス体制がユダヤ人犠牲者から契約履行援助金（脱出用等―筆者）として引受けたものや死体から剥ぎ取った金歯や指輪までもがあった。これらの金は，ライヒスバンクにおいて直ちに溶解されたため購入者はその出所を特定できなかった[94]。

ここでメルマーとは何であったのかにふれておきたい。これについてはインターネットのサイト「フリー百科事典ウィキペディア（Wikipedia）」では以下の説明があり，それを以下に引用しておきたい。

「Bruno Melmer（1909年ヴィースバーデンで生まれ，1982年ベルリンにて死去）はドイツ親衛隊高級中隊指導者（SS-Hauptstrumfühler）であった。彼は親衛隊本部のⅡ課，いわゆる会計課を担当した。この課はベルリンの経済管理局内にあり，SS内部銀行の機能を持つ機関であった。彼はその指導者であり，1943年5月20日から1945年4月2日までの間，ナチスの強制収容所と絶滅収容所からライヒスバンク内SS口座への貴金属と金転送に責任を負っていた。」[95]

さらに，英国生まれのジャーナリストアダム・レボー（Adam Labor）が書いた『ヒトラーの秘密銀行（Hitler's Secret Bankers）』にでは以下の事実が紹介されている。まずユダヤ人と被占領国での金等の略奪が組織的に行われていたことが記されている。

「ナチスは略奪そのものを目的とした特殊部隊まで組織した。選り抜きの親衛隊で構成された外貨防衛特殊部隊（Devisen-shutzkommando=DSK）がそれで，金塊の発見・押収を任務とし，略奪品は戦費に充てられたり，高官たちの個人財産にされた。」[96]

またメルマー・ルートと親衛隊の秘密口座についても，以下の説明がある。これは第二次世界大戦中に連合国軍が逮捕し，尋問したライヒスバンク貴金属部長アルベルト・トムズの証言にもとづくものであるという。

「ベルリンのライヒスバンクの幹部たちは，（中略）戦利品の山を前に，その扱いに苦慮した。（中略）ライヒスバンクの考え出した答えは，このような略奪品を売りさばき，その収益を『マクス・ハイリガー』の名で開かれた親衛隊の口座に振り込むというものだった。略奪品を対象としたこの口座は1942年に開設されたが，（中略）アルベルト・トムズはそれから程なく，親衛隊の略奪品を『メルマー』の名前で受け入れ，

その価値を算出して相当額をマクス・ハイリガーの口座に移すよう指示を受けたという。」[97]

スタインバーグはこれをホロコーストによる「犠牲者の金（Opfergold，victim gold）」と名づけている。そしてなぜイスタンブール支店を経由したのかについて彼の著作の第4章と第5章で，二人の人物を中心に焦点を当てながら解説をしている。第4章ではヨアヒム・フォン・リブントロプ（Joachim von Ribbentrop）の要請により，アンカラ大使を引き受けたフランツ・フォン・パーペン（Franz von Papen）が果たした役割について。また第5章ではドイチェバンク取締役を務めていたスイス人のアルフレート・クルツマイアーが果たした機能についてである。

まずフォン・パーペンであるが，彼は首相経験者であったが，カトリック貴族の出身ゆえにヒトラーやナチの高官からは煙たがられていた。他方で彼はドイチェバンクの顧客でもあり，古くからの関係でそのイスタンブール支店の金転送に関わった。「ドイチェバンクは大使のためにだけではなく，アンカラの大使館とイスタンブールの領事館の多くの職員のために金口座を開設した。」[98]というのは，ドイチェバンクにとってこの金転送に伴う収益が同行の財務にとって大きな意味をもったからであることを，スタインバーグはアプスの「自己金融とライヒスバンクに対するスイス・フランを使った金裁定取引の収益」というメモから読み取り，次のように説明している。

「この状況下で基本的諸要因はトルコが『ブリテンの連合国であり，またドイツとの友好国』であったことから，金と外国為替の自由市場を持っていた。ドイツとスイスは，固定価格で金を売買する中央銀行を持っている。このため金をチューリッヒで安く購入し，トルコで高く売却すると高収益が入りこむのだった。」[99]

次の重要人物は，アルフレート・クルツマイアーである。彼はドイチェバンクが困難な政治状況を考慮して，1943年末から本店の中央集権的な機能を分散した際に，全権を委任された支店長4人のうちの一人であった。「彼はスイス国籍を持ち，ドイチェバンクと金取引及びその金資産を安全に結合することができた唯一の人物だった」と，スタインバーグは書いている。ルツェルン生まれでスイスのパスポートを所有していた。しかし態度・素行が悪い上に，自己意識だけ高く，ナチスと関係を強めた人物であった。SS高官オスワルド・ポール（Oswald Pohl）のエージェントとなり，SSの企業（Deutsche Wirtschaftsbetirebe G. m. b. H. -DWB）に深入りしていった。ドイツのスイスとイスタンブール支店顧客のもろもろの資産を扱った。1945年2月16日スイスが全ドイツ資産を凍結した時点で，彼はイスタンブール支店の資産管理を委託されていた。支店の307kgの金とドイチェバンク・ベルリン勘定での16kgの金も含まれていた。また彼はアプスが「外為準備」と呼んだ口座の管理人としても行動していたという。これらについて，アプスの1972年の宣誓供述書から，スタインバーグは以下のことを紹介する。

「この時ドイチェバンクは，ドイチェ－アジアティシェバンク（Deutsche-Asiatishe Bank）とドイチェ海外銀行（Deutsche überseeische Bank）と共同で外貨準備をスイスに預金していた。1943年末にこれらの準備に接触できる人物がいたことは時期にかなったことであった。クルツマイアー氏はスイス市民として預金請求を行った。」[100]

敗戦に伴いナチス体制は崩壊したが，以上

の経緯からドイチェバンクが保有していた金はスイスの金庫室で生き残った。戦後1952年８月26日にドイツ連邦共和国とスイス連邦共和国は，凍結されていたドイツ資産の解除について調印した。賠償のためドイツ資産保有者に対しその1/3を放棄することが定められた。1954年にクルツマイアーは残りの2/3の金の転送をアレンジし，ドイチェバンクの三つの継承機関が所有していたデュッセルドルフにある「トリニタス資産管理会社（Trinitas Vermögensverwaltung）」へ転送した。この金323kg の売却にはアプスが41年間に渡って反対の態度を取り続けた。最終的には東西ドイツが統一しナチスの金転送の問題が再浮上した後で，やっと560万 DM で売却された。1997年に和解にこぎ着き，そのうちの280万 DM がホロコーストで犠牲となった生存者のための世界ユダヤ人賠償変換組織（World Jewisch Restitution Organization）へ，残りが生存者の行進財団（March of the Living Foudation）へ還元された[101]。

ここでこのメルマー・ルートで運ばれてきた金の出自についてアプスが知っていたのかどうか，という問題を検討したい。まずアダム・レボーの先の本では，アルベルト・トムズに対する尋問記録（1945年５月８日付け）から以下のことが分かっている。

「『メルマー』ルートは極秘扱いで，その存在を知っていたのは，第三帝国のトップ数人だけだったという。尋問記録はさらに，ライヒスバンクは『ヒトラー個人のエージェント的存在として，親衛隊の略奪品を通常の金融資産に換える役目を担っていたようだ』と指摘し，『マクス・ハイリガー』と『メルマー』というコード名およびその意味はごくひと握りの者しか知らなかった，と付け加えている。」[102]

そしてこの「ひと握りの者」の中には，ライヒスバンク総裁のヴァルター・フンクと副総裁エミール・プールが入っていることが，この本の同じページで明らかにされている。そこでは追加的に，「このような複雑な操作を行うには，ナチスの他の財政部門からの相当な協力なくしては不可能であった」と書かれている。またドイツ蔵相フォン・クロジック，造幣局，ベルリンの質店，「ツィクロン-B の特許を有する IG ファルベン社と関係があり，また，ナチスが上海にも諜報網を持っていた関係上，ドイツ・東アジア・コンソーシアムの主要エージェントであった」デグッサの名が挙げられている。ここでいうデグッサとは，ドイツ金銀精錬所株式会社，デグッサ（Deutshe Gold- und Silberanstalt，略称 Degussa AG）のことを指す。ただしここにはアプスの名は登場していない[103]。

しかしスタインバーグはトムズの証言などを参考にして，最終的には以下の断定的な結論を下している。

「彼らが犠牲者の金を取引していたことを職業上知っていたことについての確かな証拠はないが，このことは彼らが知らなかったということを証明することにはならない。（中略）アプスはナチス体制化で進行した事態を知っていて，これに奉仕した。ただし彼の過失は体制に仕えた何千ものエリート達より悪いとはいえない。ただし，ドイチェバンクは犠牲者の金を取引することで，ホロコーストの成果に関わった。その金融技術と専門性によりドイツ戦争勢力の一機関となった。」[104]

以上長くなったが，中立国間での金転送と「メルマー金」の問題にする，アプスとドイチェバンクに対する評価についての諸議論を紹介してきた。ここではこの問題と先に取り上げたクロイガー債務の償還に関する問題を関連付けて考えてみたい。まずガルはクロイ

ガー債償還について，以下のようにまとめている。

「クロイガー債の買戻しは，『通常』の仲介業務であり，自己計算で業務を遂行したとはいえ，アプスをナチス体制へより接近させた。しかし戦時金融との直接的な関係は見てとることはできない。ニュルンベルク（裁判－筆者）においては『侵略戦争準備金』として取り上げられていない。」(105)

しかし，アプスがこの件で関わったスウェーデンのリクスバンクが保有した金に関しては，以下のスタインバーグの指摘がある。

「『金帳簿』はその出所であるスウェーデンのリクスバンクを記載していることから，この登録が『略奪』金である可能性を排除することはできない。リクスバンクは中央銀行としての通常取引業務目的で，ベルリンのライヒスバンクに寄託口座を設定していた。1940年10月ドイツ当局は残余のクロイガー債の取引で，割引された金額で金をもって支払った。この金はリクスバンクの寄託口座へ移転された。」(106)

以上にみるように，両者の推測と見解は相互にぶつかり合うものである。しかしどちらが妥当するかどうかはさておき，アプスは個人的委託業務としても，またドイチェバンク外国部長の立場でも，占領国と中立国諸国間における金転送業務を重要な収益源として位置づけ，この取引を行っていた事実は確認された。この中にはメルマー・ルートを通過した金も含まれていたことは否定できない。アプスの配下には様々な人物がいて，体制を批判し，死に追いやられた役員もいた。逆に体制側に積極的に接近していった役員もいた。アプスを含めこれら役員がメルマー金塊の起源について知っていたかどうか，については確実な根拠はない。しかし取引金量が比率的少なかったとはいえ，アプスはドイツと占領国・中立国間での金転送システムに組み込まれ，それらの業務をベルリンから統括した。したがって，それらに関わるビジネス・システムを構成する一員として，戦時金融業務の一部を間接的に遂行したことは否定できない。

ただアプスがこの体制の一部に組み込まれたとはいえ，ナチス政治・経済体制との関連では，以下で取り上げるような複雑で微妙な関係があった。結論を急がずにこの問題にも触れておきたい。

（11）アプスと抵抗運動，間接的支援

「アプスがナチス体制といかなる程度実質的に関わったか評価するのは難しいが，同様の問題が他にもある。それは抵抗運動へどの程度関わったのか，という点を評価すること」である。(107)このように断ったうえで，ガルはアプスと抵抗運動との関係という論点に焦点を移している。

まずこの問題でのガルの関心事は二つある。その第一は，ペーター・ヨルク・フォン・ヴァレンブルク（以下ペーター・ヨルクと略す）とクライザウ・サークル，特にヘルムート・ジェイムズ・フォン・モルトケ伯爵（以下モルトケ）との接触状況を証明することである。第二は，アプスを連合軍諸国との仲介役に仕立てようとする計画についての信憑性を確認することである。その際ガルは，アプス自身は，この接触が過大評価され抵抗運動の隠れた闘士と見なされることに対して，拒否的態度を取ったことをまず明らかにしている(108)。

この点に関するガルの著述の紹介に入る前に，クライザウ・サークルの名前の由来についてみておきたい。クライザウはブレスラウ（現ポーランド）から60キロ南西の山間にある盆地である。20世紀初頭には，ここに典型的なシュレージェンの街村と農場があった。またビスマルク時代のプロイセンの元帥モル

トケの甥の孫に当たるモルトケ伯爵が生まれた居城があった。このサークルの中心メンバーはカトリック系キリスト教徒であったが，その他にも多様な顔ぶれが集まった。会議は主としてベルリンで開かれ，クライザウでは３回ほどしか行われなかった。しかし親衛隊（SS）が摘発目的で，この名をグループ名として使用した。1944年７月20日にシュタウフェンブルク大佐によるヒトラー暗殺計画（コード名ヴァルキューレ作戦）が未遂に終わった後，この抵抗運動に精神的側面で関わっていたこのサークル・メンバーにも逮捕の手が伸びた。この結果，関係者の多くがベルリンのプレツェンゼー監獄等で処刑されていった[109]。

このグループへのアプスの接触は極めて薄いものであったこと，また接触を証明することになる資料についてはアプスが慎重に気を使っていたことを，ガルは重視する。アプスはナチス時代においても，一方では政府批判を公的に明言していた。しかしこれは風刺をこめた形式上の批判であった。自らに対する攻撃を受けないように，また「国家反逆者」の刻印を押されないように細心の注意を払っていた。さらに特に文書に残る場合には表現を控えめにし，その代わりに口頭では文書では表せない皮肉交じりの報告を行っていた，というのがガルの基本的アプス像である。このような態度は戦後も一貫していたという。その例として，カール・ゲルデラー（Karl Goerdeler）との接触を，アプスが１回で打ち切ったことをガルは重視している。ゲルデラーはライプチッヒ市長でヴァルキューレ作戦にもとづくクーデー成功後に，首相になることを予定されていた人物である。もし彼に軽率に会っていれば，親衛隊に逮捕され，最終的には生命の危険に晒されるとアプスは考えていた，とガルは捉えている[110]。

ところでアプスがゲルデラー以上に親密に関係を持ったのは，モルトケとペーター・ヨルクであり，彼らとは1920年代末から家族を含め接触していた。さらに，モルトケの妻とアプスは遠籍関係にもあった。ただしペーター・ヨルクとは継続的な友好関係を持ったが，モルトケ夫妻とはアプスは明らかに距離を置いていたという。このことはモルトケがその夫人マリオン（Marion）宛ての手紙の中で書いていたように，モルトケはアプスについて懐疑的な書き方をしていることに見て取れる，とガルは紹介する。

アプスの抵抗運動への接触がピークとなったのは1941年であった。この年の下半期に，このグループの幹部は将来の準備と組織の位置づけを検討していた。アプスは彼らと幾度か会い，通貨問題について話をした。なおこの時期には，ペーター・ヨルクがアプスに直接的な協力を要請したことを，マリオン・ヨルクが1947年にハンブルクで開かれた非ナチ化委員会で報告している。この要請にアプスがどう対応したか，ガルはゲル・ファン・ルーン宛てのアプスの書簡とギュンター・ガウスの著作を用いて説明する。まず前者では銀行に対する責任に言及している。また両者と深い関わり合いを持つことに対するアプスの妻の警告もあり，アプスは協力を拒否（断念）したことが指摘されている[111]。

これに加えドイツの戦況悪化に伴い，軍指導部の大部分が抵抗運動に活路を見出す可能性については，アプスは大きな疑問を持っていたことが指摘される。すなわち，モルトケと同様に将軍たちの大部分は，抵抗の意志に欠けている，とアプスは考えていた。さらに抵抗運動側に，体制に取って代わりうるだけの経済界の首脳部を構成する人材を，足並み揃えて用意する力量と準備があるかどうか，アプスは懐疑的に見ていた，ともガルは付け加えている。

以上のことからアプスは沈黙を守り通し，積極的な抵抗行為に参加することはなかった。またクーデター（Staatsstreich）が成功した

場合には，西側連合軍諸国との交渉に当たる心づもりをしていたとはいえ，このようなクーデターに積極的に加わることも拒否していた。このためモルトケの側では，1943年5月半ばの精霊降臨祭に開くクライザウ・サークルの会合へアプスの参加を期待していたが，アプスがこの会に出席することはなかった[112]。

このようにアプスは抵抗運動への直接的協力には慎重な態度を取り続けた。ただし，このサークル・メンバーを間接的に支援することは行なっていた点をガルは強調する。このことをガルの著述にしたがい，以下で紹介する。

まず1938年8月9日に，フリードリッヒ・ケムプナー（Friedrich Kempner）から，抵抗運動に関与したキリスト教神学者ディートリヒ・ボーンヘッファー（Dietrich Bonhoeffer）の義弟ハンス・フォン・ドナーニ（Hans von Dohnanyi）を紹介された。ドナーニはライヒ法務大臣付きの担当官であったが，彼のためにケンプナーはアプスに他の適当な仕事がないかどうかを依頼した。1941年の最初の会合で，ドナーニがケルンの銀行の取締役入りに関心を持っていることが分かり，アプスはそれを支援することになった。ここでもアプスの個人的な遠戚関係が利用され，紆余曲折を経てドナーニは新たな役職を得た。しかし彼は市民生活を享受しないまま守備隊に留まり，親衛隊の監視下に置かれた。そして1943年春に逮捕され，終戦時ザクセンハウゼン強制収容所で殺害された。

この例に見るように，アプスの第三者に対する救援活動は非常に抑制されたものだった。それはこのような活動が彼の金融業界での彼の地位を脅かすものとなるからだった。オズワルト・レースラーの逮捕（後に釈放）や敗北主義的言動を持ったドイチェバンク役員二人に対する死刑判決に見られるように，ナチス体制はドイチェバンクの役員に対しても，厳しい態度を取ることに決してためらいを見せていなかった。以上のことを踏まえて，この項目の最後の二つの段落で，ガルは民間人アプスに迫る身の危険について，以下のようにまとめている[113]。

まず，アプスはライヒスバンクと経済省と友好関係をもっていたが，これはナチスのテロ機関に対して重要性を持つものではないと自覚していた。また自らについての資料と情報が収集されていることも知っていた。少なくとも1942年11月の彼に対する党の攻撃以来，実際上も危険な状況にあったことは明らかだった。このため，肉体と生命を脅かされた者に対する直接的な救援活動においては，アプスは体制の暴力機構へ直接影響を与える行為をアプスが取ることはかった。彼の救援活動は，あくまでも第三者としての介入に留まっていた。この例としてライヒ外務大臣ヨアヒム・フォン・リッブントロプ家との関係が説明されているが，これについては省略する。

以上，アプスと抵抗運動との関係についてガルの紹介と解説を見てきた。この項を終わるにあたり，1923年12月から1939年1月までライヒスバンク総裁の職に付いていたシャハトが戦時下でたどった運命を取り上げておきたい。それはアプスの生き方と比べ，検討するためである。このために以下においてジョン・ワイツの著作 *Hitler's Banker* の日本語訳『ヒトラーを支えた銀行家』と有沢廣巳の私家版の刊行書『ワイマール共和国』の記述を見ていく[114]。

1934年8月から1943年1月までは経済大臣でもあったシャハトは，4ヵ年計画とその軍事融資を推進するゲーリングと対立し，ヒトラーの怒りを買っていた。このため，1944年7月23日に二人の平服警官によって逮捕された。「ヒャルマー・シャハトは，それからの4年間を32の刑務所と強制収容所で過ごした。」[115]

なおこの逮捕劇には，プロイセン高官の娘であるシャハトの前妻ルイーゼ・ソワーズが

関わっていたことを有沢が以下のように紹介している。

「二人は1903年１月10日に結婚した。（中略）この結婚は最初のうちは全く幸福そのものであったが，第一次大戦後，政治問題が家庭の中に入りこむようになったとき，破綻を生じた。とくにヒトラーが政権を獲得すると彼女は熱狂的なナチス傾倒者となり，シャハトがヒトラー政権の後期になって批判的言辞を吐くようになったとき，妻が夫を告発するといったような状態にまで立ちいたった。」(116)

シャハトは戦争末期にアメリカ軍の「特別捕虜」となり，イタリアとフランスの捕虜収容所を経てニュルンベルク裁判に掛けられる。しかし最終的に５回目となる裁判で，ナチ関与に関しては無罪判決を勝ち取り釈放されることになる。

シャハトがライヒスバンク総裁を解任される契機は，通貨価値下落を防ぐためメフォ手形の発行に終止符を打出したことであった。他方，大臣解任の契機となったのは，彼の反戦思想やユダヤ人問題でのナチス体制の幹部たちとの見解の相違にもとづくものであった。また1942年11月にはゲーリング宛の手紙の中で，ドイツが戦争に負ける理由を指摘し，連合軍との平和交渉を勧告した。さらには「シャハトは1938年以来ナチに反対している者たちとの接触を保っていた」という(117)。

共に戦争を生き抜いた二人であったが，アプスとシャハトの行動様式には決定的相違がある。ナチス批判を頭の中に留め悟られぬよう装っていたか，態度に表したかの相違である。それは国家公務員という官職にあった者と民間人の違いである，とも思われる。またヒトラーとも直接話ができたかどうか，という点が大きかったのではないか，と筆者は考えている。シャハトは知名度が高く，ナチ高官も逮捕後も勝手な対応はできなかったであろう。

また性格的にもはっきりものを言い，文書でもナチス批判を堂々と行うシャハトと比べると，アプスは一介の民間人であり，自己の保身と安全を第一に考えていた慎重居士であった。何より，迫り来る身の危険度はアプスの方がより大きなものであったのではないか，とも考えられる。さらにこのような危険な時代においては，それぞれの配偶者がどう対応し，どういう役割を果たしたか，ということも大きな作用を及ぼした。シャハトの場合には，結果として元妻に裏切られたことになる。アプスの場合には，抵抗運動に関係することについては，妻の側からは慎重な行動を懇願されていたのであった。

（12）IG ファルベン問題でのアプス非難とガルの反論

さてドイツの大規模銀行は企業の監査役会へ重役を派遣するのが習わしであり，アプスも第三帝国下において相当数の監査役を引き受けていた。このため合衆国軍事委員会は1945年にアプスを「戦犯」リストに挙げ，拘留するように勧めていた。ドイツでは1990年代に多くの研究書が公刊され明らかにされたが，統制経済下において多くの企業が捕虜，民間人逮捕者，強制収容所収容者を使った強制労働と関わっていた。その例としてドイチェバンク役員としてアプスが派遣されていた企業もいくつか挙げている(118)。

① Uボート・トルペドス・V2ロケット用特別蓄電池メーカーであったVARTA AG。
② ベルリンのドイツ弾薬製造会社（Deutsche Waffen- und Munitionsfabrike AG）。
③ IG ファルベン（I. G. Farben）。

特に IG ファルベンについては，「一見すると，アプスをナチス体制とその最も重要な

臣下に近づけた」[119]という形容詞をつけた会社であり，ここにガルの基本視点が出されている。この問題を以下で解いていきたい。

まずこの企業が，強制労働システムを間接的に開発しただけではなく，アウシュヴィッツにおいて神経ガス・ツィクロンBの製造に間接的に参加していた。IGファルベンの幹部のうち13名が半年から8年の実刑判決を受けた。ガルは，次のように述べることで，問題提起を行っている。

「同社監査役員であったアプスはこのコンツェルンが関与した犯罪の何について知っていたのであろうか，または知ることがありえたであろうか。アウシュヴィッツ工場建設において，強制収容所の捕虜を投入したことについて何を知っていたのであろうか。強制収容所でIGファルベンが出資した会社，害虫駆除会社デゲシュ（Degesch）がツィクロンBを投入したことについて，彼は何を知っていたのであろうか？そもそも彼は強制収容所の捕虜の投入などに関わる決定に具体的に関わったのであろうか。」[120]

以上の問題に対しガルは自らの見解を対置していく。まずこれらの非難は十把一からげに行われている，と指摘する。特にガルが性急な結論付けと見ているのは，元来は害虫根絶用のツィクロンBの利用について，アプスはIGファルベンの監査役員就任（1941年2月7日）に当たって何ら知らされていなかった事実を重視するからである。その根拠としてガルはいくつかの根拠を挙げている。

第一に，IGファルベンが42.5%資本参加していた デゲシュの監査役に出向いたIGファルベン取締役員の多くはその事実を知らされていなかった。このことはニュルンベルク裁判の判決で確定された。また製造されたツィクロンBのうちアウシュヴィッツへ送られたのは全量中の2～3%以下であった，というピーター・ハイエスの研究結果を，ガルは引用している。[121]

この後者の根拠は使用（転用）自体が問われることが問題なのであり，比率についてはあまり説得性がないと筆者は考える。ただしこの化学会社役員が事実を知らされなかったという点に関しては，妥当性がありうると考えられる。

次にガルはアプスがアウシュヴィッツにおけるIGファルベン工場建設時に投入された強制労働についてアプスが知っていたかどうか，また同社監査役会でのその決定に加担したかどうかの問題を取り上げる。これも回答を出すことが困難な問題とされている。ただし，以下の論述においてガルは，この巨大会社に派遣された銀行重役としてのアプスの地位がいかに些細なものであったのか，という事実関係を重視する。この点では，IGファルベンがこの体制にとって軍備と自給自足という経済政策上，非常に重要な役割を持たされていた問題に焦点を当てている。ちなみにこのコンツェルンの19人のエリート指導部のうちナチ党員でなかったメンバーは二人でしかなく，この点ではドイチェバンクの役員会とは大きな相違があった[122]。

そして以上の点について，ガルは以下の側面に分けてそれぞれを解説していく。

① IGファルベンとドイチェバンクの力関係。
② アウシュヴィッツの立地条件。
③ IGファルベン増資にあたってのドイチェバンクの関与度。

これらについては，項を変えて順次一つずつ見ていきたい。

(13) 銀行と化学企業，アウシュヴィッツの工場立地とIGファルベンの増資

① IGファルベンとドイチェバンクの力関係

ガルはIGファルベン社を「巨人のような工業企業（Industriegiganten）」と表現する一方で，これに対するドイチェバンクを「小人」として扱っている。つまり両者はドイツにおける通常の銀行と企業の関係とはかなり異なる特殊な関係にあった，と把握する。その根拠として，化学工業が持つ資本金の規模，銀行を上回る流動資金量により銀行に依存しない経営体質，また株式分散による取締役の強力な地位を挙げる。このためドイチェバンクの役割は監査を行うというものではなく，単なる経営上の相談相手でしかない，と見る。同社の財務責任者であった枢密顧問官ヘルマン・シュミッツ（Hermann Schmitz）がドイチェバンク取締役会長モースラー亡き後，派遣役員の後任にアプスを選んだ。その手続きは同社がアプス個人及びドイチェバンクへ要請したことを，ガルは紹介している[123]。

そもそも創業以来，同社の監査役会は取締役会に対して従属的位置にあった。けだし指導的な歴代の監査役会長が，カール・デュースベルク（Karl Duisberg）以来強力な影響力を保持してきたからであった。1935年まで会長を務めたカール・ボッシュ（Karl Bosch）の没後は，ゲーリングの原料資源・為替局に派遣されていたカール・クラウフ（Karl Krauch）が呼び戻され，1940年にその後を継いだ。彼は1938年にゲーリングにより4カ年計画「化学製品特別問題全権委員長」に任命された。

さらには監査役会には，この企業の指導を内部的に進める作業部会が設置されていた。このため「アプスのような『通常』の監査役員は経営に関する機能を持つことはない」というのが，ガルの結論である[124]。

② アウシュヴィッツの立地条件

1940年秋にIGファルベン社，ライヒの圧力で中央ドイツにおける合成ゴム工場建設計画を立てた。工場はブリテンにより行われた爆撃の射程距離外にある東部とされた。しかし代用品製造工場の新設はコスト面も品質の面でも採算がとれず，同社はあまり乗り気ではなかったという。アウシュヴィッツでの工場建設の決定は，強制収容所が近くにあり，低コストの労働力が利用できるからであるとの理由が，長い間考えられてきた。しかしここで，ガルは経済史家ハイエスの1987年の研究所を用いて，この考えに反論を加えている。

それによると，最初にアウシュヴィッツの工場建設の決定が下された後に，親衛隊の捕虜移送用の収容所が強制収容所へと転換されたのであると。しかしこの反駁に対して，立地に際して早い時期から収容所の存在を考慮していたし，クラウフもそう考えていたという他の議論もある。また1939年の時点では詳しいことは決められていなかったなどの他の研究者による資料紹介も出てきていて，この問題はいまだ決着が付いていない。ガルはこれらの諸議論を紹介すると同時に，次のような指摘をしている。「強制収容所の囚人労働は，工場建設の決定的な要因ではなかったのではないか」と[125]。

その根拠として，経済史家ゴットフリート・プルムペ（Gottfried Plumpe）に依拠して，囚人労働の占める割合が20～25%であったこと，作業能率は栄養不良と死の脅威で非常に低かったことを挙げる。ただし多くの企業が軍隊への召集により労働力不足に直面していたため，戦争捕虜と並びその労働力供給なしには経営を成り立たせていけなかった面があったことも，ガルは合わせて指摘する。

そして以下でガルは，アプスがこのアウシュヴィッツでの工場立地の決定については関わっていなかったことを説明する。当時の監査役会は投資決定や共同決定をする責任も義務も負っていないため，彼がこの決定について知っていたかどうかということ自体が問題となると。1941年2月6日にクラウフと二人の取締役が新工場をアウシュヴィッツに立地することを決定した。そこにポーランド人住民を強

制移住させ，ドイツ人労働者と募集された「外国人労働者」が投入される予定であった。

1日後の7日にベルリンでIGファルベンの監査役会が開催され，アプスも参加した。会議は報告のみで，軍事会議のように短時間（1時間半）で終了した。その後アドロン・グランドホテルで昼食会となり，将来計画・投資や新工場については一言も触れられなかった。そこでは質問が出されることも例外であった。この点では12年間常に1時間かからない株主総会においてとまったく同様であった，とガルはアプスのシュミッツ宛て書簡から読み取っている。シュミッツとの会談においても，アウシュヴィッツ関連のことは何も話されていないと。このような茶番劇が実際におこなわれたのだろうか，とガルは問題を出し，以下で答えを求めている[126]。

③　IGファルベンの増資

5億RMとなるこのIGファルベンの新工場建設への投資額は，巨額のものではなかったのだろうか，この提案に対しては疑問も応答もなかったのであろうか，とガルは問題を投げかける。そしてこれに関する説明資料があることも期待できないこと，というのは軍事上の機密保持の義務があるため，監査役会にも足枷が嵌められていたからである，とガルは説明し，以下の結論を導きだしている。

「『アウシュヴィッツ』問題については誰もが公には議論できないどころか，この時点で同地を後の絶滅収容所と決定することなどは想像外のことであった」。[127]

ガルによるとIGファルベンとドイチェバンクが協同作業した唯一の作業が増資の問題であった。当時は6％の配当制限令もあり，秘密積立金の資本金への組替を行って，株主へ無償株を割り当てることで配当率を維持することができた。他にも新株発行予約権付きの証券を発行するなどの方法もあった。アプスはシュミッツへ諸増資方法の助言をしたが，行われた提言がIGファルベンにとって重要性をもっていたかどうかについては，議論の余地がある，とガルは断っている。

そして再度以下の二つの問題を提示する。第一に，アプスはIGファルベンについては情報を入手していたのかどうか，アウシュヴィッツ工場の存在について知らされていず，強制収容所における制約を受けない囚人労働について沈黙していたのかどうか，と。これに答えるためにガルはある文書を提示している。それは1943年7月2日のドイチェバンク取締役会にアプスが保持した4ページの年次報告書である。彼は同僚の役員に「極秘」条項を付けて回覧させることで報告をしていた。

それによると（IGファルベンの－筆者）投資は6億1700RMで，全額償却済みの4億RMが追加されたとある。この背後には経営的には意味のない，体制により強制された特別償却が隠されていた。（アウシュヴィッツとハイデブレクの東部工場の機械設備と建物の償却）このことをアプスは口に出していたに違いないこと，しかし詳細が報告されたかどうかについては，文書は何も示していないと，ガルは述べている。というのは，IGファルベン内の慣習は通常とは異なり，1941/42年以来機密保持のため報告書類には様々な制約があった。このため「重要な報告」は「何ら期待できなかった」と[128]。

アウシュヴィッツから30kmの距離にあるドイチェバンク・カトヴィッツ支店はIGファルベンとの取引が業務の80％に及び，IGファルベン建築指導部の財務事務所を銀行幹部が1943年4月2日に訪問した文書があるものの，これはベルリンへは送られていなかった。このためアウシュヴィッツの殺人工場における事態について，ドイチェバンクの取締役やアプスが知っていたかどうかは不確かである，とガルは述べる。以上の点についてのガルの結論は微妙な点を含むため，以下に再度引用

しておくことにする。

「彼は尋ねられても答えないか，恐らくはあまり満足がゆかず，極端な場合には良心を煩わす公的な答えをするかもしれない。彼が知っていたこと，おぼろげながらも知っていたかもしれないことは，突き止める術がない。恐らくそれは多くの場合そうであるように，多かれ少なかれ衆知の『正確に知ろうとは思わなかった』ことであり，調査を妨害している。このためすべては憶測（Spekulation）でしかない。彼が東部の絶滅収容所の存在について知らなかったことを主張しているわけではなく，むしろ逆である。彼は『マイダネクとアウシュヴィッツの恐るべき事態について知っていることを否定する人間には属さない』，彼は30年後にヨアヒム・フェストとのあるインタビューの中で明言した。『そのことについて何も知らなかったと言い逃れをしようとは思わない』」(129)

以上の叙述から読み取れることは以下のようなことではないかと，筆者は考える。IGファルベンのポーランドにおける工場建設と目的についてアプスは一方では，ある程度の情報は入手していたであろう。しかし他方，この問題については，同社の監査役会で問いただすことができない雰囲気であったと思われる。同社の役員会のほとんどのメンバーがナチ党員であることをみればそれは明らかである。また数は少なかったが，ドイチェバンクの役員会にもナチス関係者が存在した。この点については，日本語訳では『ナチス・ドイツ，IGファルベン，そしてスイス』という著作を書いた，フォルカー・コープ（Volker Koop）が以下のように述べている。

「アプスの個人秘書兼アシスタントは親衛隊（SS）隊員のウルリヒという男だった。アプスがIGファルベンの監査役会でドイツ銀行の代表を務めていたのに対し，ドイツ銀行の監査役会には枢密顧問官のシュミッツがいた。」(130)

このシュミッツについては別の個所でコープはナチスとスイスが絡む戦時下の「経済犯罪劇」の数多くの役者の１人，「誰もが認めるIG帝国の支配者であった名誉法学博士ヘルマン・シュミッツ」として紹介している(131)。そしてコープは，この役者のなかに，第二次大戦の終結後にアプスの名が加わったとしている。ただしアプスが登場するのは戦中にIGファルベンの資産をスイスのIGケミ（後にインターハンデルと社名変更）の資産に偽装した結果，ドイツ側が資産返還をスイスに要求するが，結果として実現できなかった問題との関係で言及したものである。したがって戦時下においてアプスが果たした役割に言及したものではない。

以上横道に逸れた。いずれにせよ，IGファルベン及びドイチェバンク内にも多くの監視者がいる中で，アプスがこれらIGファルベンの絡む「経済犯罪」の問題に触れ，口に出すこと事態が恐らく自殺行為となったであろう。事実を知っていたとしても口を閉ざし，終（敗）戦を待つ以外には手はなかったのではないかと，筆者は考える。同じことは「犠牲者の金」を含むドイチェ・ライヒと「中立国」間での金取引にもあてはまるのではないか，というのが筆者の見解である。

---

(78) Lothar Gall, *Der Bankier. Hermann Josef Abs, Eine Biographie,* München2004. S. 88. 及びこの章の脚注116。なお脚注では「論争の余地のある脚色された『ドイツ民主共和国（DDR）の地位』について，ハンス・ラダントの以下の著作を参照」と書かれている。Hans Radandt, *Hermann J. Abs.-Bnkier im Geheimauftrag Görings,* in Jahrbuch für Wirtschafts-geschichte

1974，H. 427-55. 以上，Lothar Gall, *a.a.O.*, S.453f. Fußnote116.

この旧東ドイツの歴史家は，モスクワにある戦時中の記録を使い，アプスが「第二次世界大戦の経済的準備と遂行の大部分に関わったドイツの大コンツェルンの取締役だっただけではなく，ドイチェバンクの対外業務拡張全体の指導者でもあった」と書いている。Hans Radandt, *a.a.O.*, S. 27.（上記ガルの脚注116）なおこの論文の最後には，モスクワ所在の戦時中のドイツ軍の国家機密に関わる記録が１番から17番まで付せられている。このうち，９・12・14番の記録にアプスの名が登場する。前二者はオットー・ヴォルフ商会との証券業務をめぐるカドギエンとアプスとの会談内容，最後のものは，スイスに対するドイツ・ライヒス・バーンの債務免除に関する事項についてである。Ebenda, S. 48-53.

(79) Lothar Gall, *a.a.O.*, S. 89f. なおこのエンスキルダ・バンクは，後述するIGファルベンが戦時下の「中立国」スウェーデンにおいて，その資産保全のための偽装工作に利用した銀行であったことが，以下の二つの著作で説明されている。黒澤隆文編訳『中立国スイスとナチズム―第二次世界大戦と歴史認識（独立専門家委員会＝第二次大戦　第一部原編）』，京都大学学術出版会2010年，338～340ページ。Volker Koop, Das shmutzige Vermögen, München2005. フォルカー・コープ（八木正三訳）『ナチス・ドイツ，IGファルベン，そしてスイス銀行』，創土社2010年，42ページ。

(80) Lothar Gall, *a.a.O.*, S. 91.

(81) Ebenda, S. 92. 及び Hans Radandt, *a.a.O.*, S. 36.（上記ガルの脚注116）

(82) Lothar Gall, *a.a.O.*, S. 92.

(83) Lothar Gall, *a.a.O.*, S. 93.

(84) Lothar Gall, *a.a.O.*, S. 93. なお脚注135でガルはその根拠に，ドイツ・ブンデスバンク文書館の金庫文書を挙げている。

(85) シャハトとゲーリングが関わりヒトラーが押し進めた「４カ年計画」とそれにつながる「音無しの金融」については，ニュルンベルク国際法廷で明らかとなり，ドイツでも解明のための研究が進められた。日本でもその成果について研究・検討された。以下にそれらの著作と拙稿を掲げておく。

Kahl-Heinrich Hansmeyer und Rolf Caeser, Kriegswirtschaft und Inflation（1936-1948），in：Deutsche Bundesbank（Hrsg.），*Währung und Wirtschaft in Deutschland 1876-1975,* Frankfurt am Main1976. カール・ハインリッヒ・ハンスマイヤー/ロルフ・ツェーザー「戦時経済とインフレーション（1936-1948）」，ドイツ・ブンデスバンク編（呉文二・由良玄太郎監訳）『ドイツの通貨と経済』（上）所収。栗原優『第二次世界大戦の勃発』，名古屋大学出版会1994年。大島通義『総力戦時代のドイツ再軍備―軍事財政の制度論的考察』，同文館1996年。拙著『ドイツ証券市場史―取引所の地域特性と統合過程』，北海道大学出版会2006年，第4章。及びこれを要約し補足を加えた拙稿「ナチス期の戦時金融についての覚え書き」，同人誌編集委員会編『ブレーメン館』第３号，2005年所収。

(86) ガルはその根拠に脚注136で，英独の諸文献を挙げている。

(87) スウェーデンは開戦初期には金準備の一部をアメリカ合衆国へ避難させていた。リクスバンクのルーツは，ドイツへの金転送についての情報を合衆国が掴んだ場合，金転送を将来拒否されるのではないかと恐れて，クロイガー債関係の金は合衆国へ持ち込まなかった。これはロンドン債務協定会議で明らかとなったことについて，ガルは脚注138で触れている。

(88) Lothar Gall, *a.a.O.*, S. 94f. .

(89) 例えば金はドイツの対外債務削減に少なくとも意味を持ち，敗戦の場合にライヒの戦時賠償金負担を軽減するかもしれないとか，金の経済価値は長期的には問題をはらみ，通貨との交換性を保証するものではないとか。また1940年９月にクロイガー債業務を開始した時点では，ドイツの勝利が見えていたのではないかと。Lothar Gall, *a.a.O.*, S. 95.

(90) Jonathan Steinberg, *The Deutsche Bank and its Gold Transactions during the Second World War.*（ドイツ語版*Die Deutsche Bank und ihre Gold－ Transaktionen während des zweiten Weltkrieges*）, München 1999.この英語版の目次を以下に掲げる。第１章序，第２章ドイチェバンクの金転送の背景，第３章ドイチェバンクの金転送の証拠，第４章イスタンブール支店の金取引，第５章アプスとクルツマイアー及び終戦，第６章結論と考察，附録（方法論と資料の評価についてのメモ，表１個別品目別のドイチェバンク金転送リスト，表２第２次世界大戦中のドイチェバンク金転送総額，第３表ウィーン・クレディトアンシュタルトのドイチェバンク勘定に関する帳簿記載リスト，第４表イスタンブール支店の顧客名簿。

(91) *Ibid*., P. 10.

(92) *Ibid*., P. 14.

(93) *Ibid*., P. 19.

(94) Lothar Gall, *a.a.O.*, S. 95. ,

(95) インターネットのサイト「フリー百科事典ウィキペディア（Wikipedia）」。 http：//de. wikipedia. org/wiki/Bruno_Melmer

(96) Adam Lebor, *Hitler's Secret Bankers–How Switzerland Profited From Nazi Genocide, 1977.*アダム・レボー（鈴木孝男訳）『ヒトラーの秘密銀行－いかにしてスイスはナチ大虐殺から利益を得たのか』，1998年KK ベストセラーズ，72ページ。

(97) 同上訳書，86～87ページ。

(98) Jonathan Steinberg, *Ibid*., p. 48.

(99) *Ibid*., P. 49. なおスタインバーグはこのアプスのメモをハンス・ワイトマンの以下の資料から読み取っている。Karte Weidtnann［sic！］, I, 2, Historisches Archiv der Deutschen Bank（HADB）, Personenkartei.

(100) Jonathan Steinberg, p. 65.

(101) *Ibid*., p. 65–66.「生存者の行進」は毎年ポーランドで行なわれる，ホロコーストを忘れないための学生向け教育プログラムである。ビルケナウからアウシュヴィッツまで数万人が参加して行なわれる沈黙の行進である。以上 Wikpedia のサイトより。

(102) アダム・レボー（鈴木孝男訳），前掲書，93ページ。

(103) またこの点は筆者の手元にある，戦時下のデグッサについてまとめたアメリカ合衆国ノース・ウェスタン大学歴史・ホロコースト研究所の教授ピーター・ハイエス（Peter Hayes）の著作*Die Degussa im Dritten Reich–Von der Zusammenarbeit zur Mittäterschaft* München2004.（英語版は以下の通り。*From Cooperation to Complicity: Degussa in the Third Reich.* Cambridge 2004.）（直訳すると『第三帝国下のデグッサ—協力者から共犯者へ』）を一瞥しても同様である。こちらの本でも「メルマー資金」転送等の問題に関してドイチェバンクの名が5回登場するにもかかわらず，アプス個人の名は一度も出てこない。

なおこの本は次に扱う IG ファルベン社とも関連があり，ドイツ語版・目次を以下に示しておく。

序言
省略記号一覧
1．導入と概要
2．企業，党，体制
3．「アーリア化」
4．アウタルキーと軍備
5．ライヒにとっての貴金属
6．軍事商品と略奪
7．強制労働
8．害虫駆除会社デゲシュ（Degesch）とツィクロンB
9．終（敗）戦と副作用

(104) Jonathan Steinberg, *Ibid*., p. 48.

(105) Lothar Gall, *a.a.O*.,S. 96.

(106) Jonathan Steinberg, *Ibid*., p. 37. スタインバークはこの記述の資料として，メルマーと他のファイルを管理したライヒスバンク・マグデブルグ支店財務部の月次報告書（Monthly Report Mai 1945を使用している。

(107) Lothar Gall, *a.a.O.*, S. 96.

(108) クライザウ・サークルについて筆者は最初にガルの著作で触れた。詳しい状況はこの問題での資料収集により，次第に理

解が深まった。またこのサークルも絡んでいた，ヒトラー暗殺計画についてのアメリカ映画『ワルキューレ』（トム・クルーズ主演，ユダヤ系アメリカ人ブライアン・シンガー監督2008年）を鑑賞したことでも関心を高めた。

また2009年８月末から研究専念期間に入り，渡独後の９月にベルリンにある抵抗運動記念館（Gedenkensttätte Deutsher Widerstand）を訪問した。ここは訪問者が多くはなく，閑散とした感があった。しかし展示は豊富で内容も濃く，訪問者がじっとたたずみ，見入っている光景が見られた。その後11月から４カ月間ハンブルクに滞在した。その間にハンブルク中央駅で雑誌Die Zeit, *Geschichte* Nr. 1/2010がヒトラーに対する抵抗運動の特集しているのを見つけた。これを手掛りにしてこの時の滞在中に以下の書籍を入手することができた。

Peter Steinbach und Johannes Tuchel（Hrsg.），*Widerstand in Deutschland 1933-1945-Ein historisches Lesebuch,* 2. Aufl.，Stuttgart2000.

Wolfgang Benz und Walter H. Pehle（Hrsg.），*Lexikon des deutschen Widerstandes,* Frankfurt am Main2001,

Günter Brakelmmann，*Helmuth James von Moltke-1907-1945 Eine Biographie,* München2009.

Volker Ullrich，*Der Kreisauer Kreis,* Hamburg2008.

なお日本語訳で以下の本も刊行されている。グイド・クノップ（高木玲訳）『ドキュメント，ヒトラー暗殺計画』，原書房2008年（Guido Knopp，*Sie wollten Hitler töten,* München2004.）。この本は訳者あとがきによるとドイツ第二テレビ（ZDF）が2004年に放映した番組の原案である。なおウェブ・サイトでみると，ZDFは2009年１月13日に，「歴史の真実（*Die Wahre Geschichte*）」というドキュメント番組を組み放映している。また日本では，NHK が同年９月８日に「新証言・ヒトラー暗殺計画」をBS-hi『歴史発掘』で放映している。筆者は帰国直後で残念ながらこれを見逃した。

(109) Volker Ullrich, *a.a.O.,*S. 7，S. 12. 及びグイド・クノップ，前掲訳書，232ページ。

(110) Lothar Gall, *a.a.O.,*S. 95. ガルはこの章の脚注149と150でこのこと以下の文書で実証している。Lothar Gall, *a.a.O.,*S. 456. 一つはアプスのゲル・ファン・ルーン宛て書簡（1962年２月29日付け）であり，もう一つはルーン自身の著作である。ルーンはオランダ人であるが，第二次世界大戦後にアプスに神事中のことを訪ね，アプスがそれに書簡で答えた。ところでルーンの著作はフォルカー・ウルリヒによると，以下の二つがある。Ger van Roon, *Neuordnung im Widerstand. Der Kreisauer Kreis innerhalb der deutschen Widerstandswebegung,* München1967. 及び *Widerstand im Dritten Reich. Ein Überblick,* 6. Überarb. Aufl.，München1994. ガルが引用したのは，後者である。前者がクライザウ・サークルについて書かれた最初の本格的な研究書であったことがウルリヒにより，指摘されている。

(111) Lothar Gall, *a.a.O.,*S. 97. なおモルトケの側ではアプスと接触する意欲を持っていたことは，モルトケの伝記を執筆したギュンター・ブラケルマンの以下の記述からもうかがえる。「モルトケはさらにコンタクトを持とうと努力した。彼は妻がアプスと親しかったヨルクの所で，ケッセルとシューレンブルグとともにアプスと会合した。（中略）アプスは他の友人たちが持ちえない金融政策・外交上の資料と事実に関する洞察を身に付けていたからである。クライザウ・サークルは彼に何度か相談に乗ってもらっていた。」Günter Brakelmmann，*a.a.O.,* S. 155. なお，アプスの妻の警告につてガルはギュンター・ガウスの以下の著作をもとに書いている。Günter Gaus，Hermann Josef Abs，Organist an den Registern wirtschaftlicher Macht，in：Günter Gaus，*Zur Person, Porträts in Frage und Antwort.* 2. Band. München 1966，37-51.

(112) Lothar Gall, *a.a.O.,*S. 97f.　なおブラケ

ルによるとクライザウ・サークルは1941年11月26日にモルトケとペータ・ヨルクによって設立準備が始められ，最初の会合が1942年５月末の聖霊降臨祭だった。また当初は２月や３月の復活際も考えられていたという。Günter Brakelmmann, *a.a.O.,* S. 172.

(113) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 99f. なおスタインバーグがこの二人について書いている。一人はムッソリーニの敗北についてコメントをしたシュツットガルト支店長のヘルマン・ケーラー（Hermann Köhler）であり，1943年10月８日に死刑判決を受け，一ヶ月後に執行された。もう一人はゲッペルスを「猿」，ゲーリングを「虱」，ヒトラーを「詐欺師」と呼んだルドルフ・フライスラー（Rudolf Freisler）であり同じ運命を辿ったという。Jonathan Steinburg，I. b. d，p. 59.

(114) John Weitz, *Hitler's Banker,* Boston1977. ジョン・ワイツ（糸瀬茂監訳）『ヒトラーを支えた銀行家』，青山出版社1977年。有沢廣巳の私家版刊行書『ワイマール共和国物語』上下巻，東大出版会1978年。

なお有沢のこの本が私家版として出版されたのは，本人が自分は歴史家ではなく，「私の主観的な批判をまじえたワイマール共和国物語であって，ワイマール体制の再評価を企てることは私の力の及ぶところではない」と，謙遜しているのがその理由である（上巻の序参照）。また刊行に当たって本に差し挟まれた挨拶文の中にも「私の個人的興味による，いわば道楽的所産」と書かれている。

したがってこの本は市販されていず，希少本である。筆者はこれを日本証券研究所主任研究員で証券経済学会元代表理事の小林和子から譲り受けた。専門に近い研究者に読んで欲しい，という意向にもとづくものであった。同氏によると，有沢は出版しないことを生前から明言し，遺族もそれを守っているとのことである。なお同氏自身，同研究所の故志村嘉一所有物であったものを，志村亡き後その遺族から譲り受けたという。このような貴重な本を譲って頂いたことを同氏に感謝する。

(115) ジョン・ワイツ（糸瀬茂監訳）『ヒトラーを支えた銀行家』307ページ。

(116) 有沢廣巳『ワイマール共和国物語』上巻25～26ページ。

(117) ジョン・ワイツ（糸瀬茂監訳）『ヒトラーを支えた銀行家』292～293ページ。ワイツによると，ルードヴィヒ・ベック将軍やゲルデラーなどがいた，という。

(118) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 100f.

(119) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 101.

(120) Ebenda. なお Degesch は以下の用語の略語であることがピーター・ハイエスの上述書の索引で見て取れる。*Deutsche Gesellschaft für Schädlingsbekämpfung m. b. H..*

(121) Ebenda. 及びこの章の脚注177。Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 457f. . なおハイエスの著作は以下の通り。Peter Hayes, *Industry and Ideology, I.G. Farben in the Nazi Era,* 2. Aufl.，Cambridge2001.

(122) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 102. なおこのような IG ファルベン社とナチス体制との関係については以下のような説明もある。「1920年代にはナチスから『国際金融資本の手先』と攻撃されていた IG ファルベンだったが，ナチ党が勢力を強めるにつれ，ゲオルグ・フォン・シュニッツラーなどの取締役たちはヒトラー指示に沿った尖兵へと変身していった。」Adam Lebor, *Hitler's Secret Bankers―How Switzerland Profited From Nazi Genocide, 1977.* 鈴木孝男訳『ヒトラーの秘密銀行―いかにしてスイスはナチ大虐殺から利益を得たのか』，1998年 KK ベストセラーズ，205ページ。

(123) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 102ff.

(124) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 103.

(125) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 104.

(126) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 105ff.

(127) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 106.

(128) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 107f.

(129) Lothar Gall, *a.a.O.,* S. 108f

(130) Volker Koop, *Das shmutzige Vermögen, München 2005.* フォルカー・コープ（八木正三訳）『ナチス・ドイツ，IG ファル

ベン，そしてスイス銀行』，創土社2010
年，203ページ。
（131）同上書，９及び29ページ。

［Abstract］

The Banker H. J. Abs in the Nazi Era: TheViewpoints of Lothar Gall and His Refutation of Abs' Critics in His Biography of Abs (Part 3)

Hironori YAMAGUCHI

The Book *Der Bankier, Hermann Josef Abs–Eine Biographie* by Lothar Gall, a historian of the Johann Wolfgang–Goethe University in Frankfurt, was published in 2004. It was the first book in Germany to describe the whole life and professional career of H.J. Abs, the director of the Deutsche Bank, including the period during the Nazi Era. In this book, Gall refutes the critics of Aps, especially the criticisms of Jonathan Steinberg. This paper introduces Gall's description of Abs' business and banking activities as the Chief of Foreign Affairs at Deutsche Bank during the Nazi Era, and discusses the viewpoints of Gall's refutations. This paper also examines the discussion between Gall and Steinberg concerning the role of Aps in the transaction of gold, including the looted gold (Melmer gold) between central banks and commercial banks of Germany, occupied– and neutral countries. And it also examines the indirect assist activities of Aps for the resistance against the Nazi regime and the business role as a board member in I.G.Farben.

Key words: Herman Josef Aps, Biography by Lothar Gall, Critics and Refutations